

内モンゴルの教育伝統について—古代から清朝を中心に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ダバラガン, メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000302

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



内モンゴルの教育伝統について—古代から清朝を中心に—

On the Educational Traditions of Inner Mongolia:
Principally from Ancient China to the Qing Dynasty

Dabalagan ダバラガン

章立て

- 1、狩猟・遊牧期（前 4c ～ 13c まで）
 - (1) 北方騎馬民族の教育
 - (2) モンゴル族の教育
- 2、遊牧・農耕の接触期（14c ～ 19c まで）
 - (1) モンゴル帝国期の教育
 - (2) 元朝下の教育
 - (3) 他のハン国の教育
 - (4) 明・清時代のモンゴルの教育
- 3、遊牧・農耕の融合期
 - (1) 清末・民国（20c ～ 1947）
 - (2) 現代（1947 ～ 現在）

はじめに

筆者は現在、京都市立芸術大学の美術研究科博士課程に在籍し、出身地である中国内モンゴル自治区¹の大学美術教育の成り立ちや現状を研究しており、将来への課題や可能性についても考察を進めている。特に東洋伝統文化と内モンゴルの大学美術教育との関係性を探り、伝統の復活・継承と新たな創造の可能性に注目している。前稿「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在—蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから—」においては、近現代の内モンゴルの美術教育についてのインタビュー調査の結果を発表した²。本稿ではその背景となる内モンゴルの教育の伝統について考察していきたい。

内モンゴルは中国の北辺に位置し、中国ではモンゴル族自治区として区画されている。自治区は118.3万km²の面積に、4200kmとなる境界線を持っており、世界第三の国土を持つ中国の中で、第三の広さを持つ省である。人口

密度は多くの省よりは低い、各自治区の中では高いランクに属する(10000km²/20)。現在の総人口数は2500万あまりで、漢族1900万、モンゴル族450万、「三少数民族」(鄂温克、鄂倫春、達斡爾)は90万、その他の少数民族50万の現状比率である。このように、内モンゴルは漢族を主体とする民族地域である³。人口主体は漢族であるが、少数民族人口の密度が高いことで、モンゴル族自治区として区分され、モンゴル族の文化を地域シンボルとしている。

モンゴルの名が歴史に現れるのは13世紀の初頭であるが、それ以前にもユーラシア大陸の草原地帯を中心に活躍する多数の民族が現れており、互いに文化と血統的な繋がりを持っていた。モンゴル以前に、土族社会だった匈奴、漢文化の影響を受けた北朝の鮮卑族、漢族の科挙制度までを取り入れた契丹と女真（今の満州族）などが中国の歴史に登場していた。現在のモンゴル文化は内モンゴルと外モンゴルを主体とする二つの地域に分かれているが、本稿では主に内モンゴルについて考察していきたい。内モンゴルは独自の文化を持っており、本稿の主題である教育についてもその歴史と文化的な伝統に基づく特徴がある。

モンゴル族の元王朝（1271～1368）の初期には漢文化に否定的な姿勢をとっており、科挙制度を廃止していたが、次第に緩和し、モンゴル人子弟の学校や科挙試験まで現れた。さらに、より広域だったモンゴル帝国の他のハン国で生まれた文化と教育も無視できない。

モンゴル帝国の衰退以降は、北方の草原地帯に退去し、北元（1368～1634）として明朝（1368～1644）と二百年にもわたる対立と戦争が続いた。その後のモンゴル人たちは清朝（1616～1912）を通じて中原文化と教育制度の影響を受け、モンゴル人子弟学校も復活した。

清末及び民国時代（1912～1949）と中華人民共和国

(1949～)以降は漢地人口の大量な流入と教育の近代化により、内モンゴルの教育は民族融合を大きな特徴に、現在まで発展してきた。

モンゴル族の伝統的な教育史についての主な研究には内モンゴル師範大学教授の王風雷氏⁴と那順巴図氏⁵の著作がある。特に王風雷氏の研究は、近現代と北元を除いたモンゴル族全史を貫通した教育の研究であり、本領域には多大な貢献をしている。また『中国古代北方民族文化史』の編纂を担当した張碧波と董国堯氏の研究もある⁶。北方民族の文化史は従来軽視されてきたが、彼らの研究によって2000年前までにさかのぼり得る中国北方騎馬民族の文化の発展史が明らかにされた。中国史と中華文化の研究において注目すべき点が多く、本研究における、北方騎馬民族であるモンゴル族の教育の伝統を研究するうえで重要な参考になった。

以下、本稿では、内モンゴルの教育体制の形成とその意義を考察するために、時代順にモンゴル族の教育の発展過程を整理した上で、モンゴル族教育の北方民族と漢族との関係性を比較し、その独自性も明かしたい。そのうえで、モンゴル族教育の古代と近現代の関係性を探り、教育の未来への展望を進めていきたい。

1、狩猟・遊牧期（前4c～13cまで）

(1) 北方騎馬民族の教育

モンゴルの伝統的な教育を論述するには、発祥地や言語、血統などにおいて親近関係のある、先行する北方騎馬民族の教育が無視できない。中国における北方騎馬民族の起源は原始土族時代にまでさかのぼるが、このうち最も早く歴史の舞台に現れたのは匈奴であり、紀元前3世紀から紀元の1世紀まで勢力を誇った。次に登場したのは南北朝（420～589）時代の北魏の鮮卑族であり、漢族文化とも深い交流をもった。その後、中国王朝の頂点とも言われる唐（618～907）王朝も北方騎馬民族の血統が多く入っているといわれる。宋（960～1279）では契丹の遼、女真の金を経て、モンゴルが北に台頭し、元（1271～1368）の中国統一に至る。その後、明朝（1368～1644）の鎖国期を経て、女真の満州族の清（1616～1912）が再び中国統一を果たす。つまり、中国史は北方騎馬民族との交流史でもあるといっても過言ではないのである。

しかも、北方民族は言語的同源性をもっており、匈奴、突厥、契丹、女真、モンゴルは、主にアルタイ語系と言われる⁷。民族系統では主に、匈奴系統、突厥系統、東胡系統などに分けられ、モンゴル族は東胡系統に区分される。各民族は独自の特徴を持ちながらも、遊牧・狩猟の生活スタイルと言語の相似性がその最たる要因と言え

る⁸。

ほとんどの北方民族は土族と家庭を単位にした生活、生産中での実践的教育を主とし、軍事教育を最重要視していた。もちろん、狩猟・遊牧生活自体も軍事教育の重要な一環になっていた。この点ではモンゴルを含めた北方騎馬民族はほぼ同様であった。道德教育は、中原民族の四書五経のような系統的なものはなかったものの、軽視されてはいなかった。匈奴は土族公有制から私有制への転換期にあたり、外部に対する略奪を重要な生産手段にしていたことで、「貴壯健」「賤老弱」であったといわれることもある。鮮卑と烏桓は老人と子供を敬愛し、公衆利益を重視する伝統があった。モンゴルは主に団結教育、親孝行の教育などが重要視されており、現在にまで受けつがれている⁹。

中国北方民族の文化は、中原のように一貫性は保てなかった。それは遊牧という生活スタイルにくわえ、内部の戦乱や、中原を囲むような地理的な位置によって、外周の文化と中原文化の影響を受けやすかったからだと考えられる。教育上は農耕文化の影響を受けつつ、遊牧の家庭や氏族を中心とする体系も保っていた。それは軍事教育を極端に重視し、遊牧・狩猟による実践知識的な教育や自民族の文化における道德教養の育成を主な特徴にしていたことである。

これらの血統的な相似性や地理環境などの関係性及び漢民族との接触度合いによって、北方民族の教育も「牧獵型の教育文化」（匈奴、突厥、契丹、女真、モンゴル）、「牧獵、農耕混合型の教育文化」（遼国契丹、金国女真、元朝モンゴル、清朝満州）、「農耕教育文化」（魏晉南北朝の南匈奴、羯、氏、羌、鮮卑）に分けられている。中国北方民族と漢族の文化・教育は決して単独で発展したのではなく、互いに影響してきたと考えられる¹⁰。

(2) モンゴル族の教育

伝説や史料によれば、モンゴルはユーラシア大陸を中心に展開した遊牧・狩猟的な文化集団であった。最初に、現在の中国東北地域に位置する大興安嶺あたりに集結し始め、9世紀頃に山林を出たと言われる。その後約400年の発展を経て、次第にモンゴルの草原地帯に移入し、13世紀初頭になって、チンギス・ハーンのモンゴル部の統一により、モンゴル帝国として、一つの国家的な集団の形で歴史の舞台に登場する。統一された部族には克烈部、乃蠻部、塔塔兒などがある。克烈はキリスト教を信仰しており、乃蠻部はイスラム教徒であった。統一された各部にはモンゴル、突厥、通古斯などの騎馬民族の血統の多くが入っていた。チンギス・ハーンの指示によって作られたモンゴル文字の創出者塔塔統阿はウイグル族で乃蠻部の人だった¹¹。

モンゴル文化は多民族と多文化の影響を受けた遊牧文化である。さらに、モンゴル文化は比較的形が遅く、かつシンプルであった故に、初期の教育は原始的であって、社会的システムとは融合しておらず、家庭が教育の主役であった。モンゴルの伝統的な教育をたどる上でも、家庭教育はもっとも重要な出発点であると考えられる。

一般的にどの国や民族にとっても、教育は家庭教育、学校教育と社会教育の三つの領域から成り立っている。このうち、家庭教育は最初期の、かつ最も基本的な単位として、一つの文化的集団のイデオロギーの伝承を反映している。家庭は士族社会の崩壊や私有制の形成に伴い、集団家庭から単位家庭に変換するに連れ形成されていき、現代へと至っている。家庭教育には二つの重要な特徴がある。まずは遺伝子のことである。親との遺伝的関係性が、家庭内教育の前提になりやすく、子供の成長に強く影響する。二つ目は成長の各段階における即時性であり、家庭教育で学ぶものは現実と最も直結することの特徴にしている。特に、社会と学校教育がまだ未発達の前近代社会の大多数の人々にとっては家庭教育が人間教育の主な場であったと考えられる。古代のモンゴルは、近隣の中国中央文明に比べて、まだ未開発で、人口密度も極めて低かったことを考えると、家庭教育が教育の中心であったことはなおさらである¹²。

しかも、モンゴルは高原気候で、シベリアを背に過酷な自然環境であり、北方遊牧民族は、中央集権的な時期は少なく、異民族間だけではなく、同じ民族間の抗争もあつたを絶たなかった。こういった歴史経験や自然環境によって、古代のモンゴルでは家庭教育と、軍事教育をとっても重視していた。その中で、現在まで継承されてきたのは「団結」の教育である。それを象徴するのが、モンゴル族の家庭教育と学科教育に関するアロンゴワと五人の息子の物語である。

元朝秘史によると「五人の息子の母であったアロンゴワは息子たちが仲が悪いのを見て、五人を呼び寄せ、最初は一人一本の矢を渡して折ってもらうとみんな簡単に折ってしまった。そして、アロンゴワが五本の矢を束ねて渡したら誰もそれを折れなかった。¹³」アロンゴワは一本の矢を折るのはたやすいが五本の矢を束ねて折ることの難しさを例に、団結することの大切さを伝えた。ここにモンゴル族の団結と助け合いを重く見る伝統的な教育と価値観が表れている。他にもこのような価値観を表すモンゴル族の諺として、「孤独な虎より、群がる雀」、「認め合いは成功に、わがままは失敗に」などがある¹⁴。

モンゴル語の「教育」という単語にも、伝統的な教育観が見いだされる。モンゴル語の「フムン」とは人間のことを指し、「フムジル」とは人間になるという意味と教育との二つの意味を兼ねている。「人間になる」と「教育」

の語源の同一性からみれば、モンゴル古来の考え方では教育は立派な人間になることであり、モンゴル人の教育の重視の伝統がうかがえる。諺にも「人間は子供から、良馬は仔馬から」、「北（遠方の意味も）へ上り良馬になる、労働（努力の意味も）で人間になる」、「ことは尽くし、塩は溶かし」、「父の言うことは子の従うこと」「励み（があってこそ）、好み（が生じ）、やる気（は出て）、知恵（が生まれ）、能力（が上がる）」などが伝わってきた¹⁵。

もう一つモンゴルの伝統的な家庭教育の特徴として注目されるのは、女性の地位が相対的に高いことである。モンゴルも父権社会であったが、女性の地位は農耕文化より高かった。保守的な儒教農耕文化の女性が主に家庭内の諸事に携わるのと違って、遊牧文化の自由度の高さに加え、女性も畜産作業にも高度に参加できることから、相対的地位が高かった。

モンゴルでは男性は放牧、狩猟、遠征で家を長期にわたって離れることが多く、家屋に残った女たちの仕事は馬車をセッティングする、ゲル（包）を馬車に積み降ろす。乳搾り、モンゴルチーズ作り、皮を剥く、皮の衣服を作るなどがある。しかも現在もなおこのような風習はモンゴルの遊牧生活の中に継承されている。

先述したように、当時のモンゴルの男性は遠く離れることが多く、特にテムジンの時代から、モンゴル統一の戦争に引き続き、金・遼・北宋との戦争と西方遠征の5年間やテムジンの没後も引き続いた彼の子孫と後継者による征服戦争は百年に及んだ。その後の明朝との長年の対立や、清朝以降に続くモンゴルの内戦などを考えるとモンゴルの八百年史は戦争史そのものであった。

このような時代背景では、モンゴルの家庭を支える役割を主に女性が果たしてきたことは必然であり、モンゴルの女性の地位が高くなるのも当然のことになる。テムジンがモンゴル各部の統一、南宋、金国、西夏との戦争、さらに5年以上かけアラブに遠征したにも関わらず、後方は安定していたのも、その母のホルホンのおかげだった¹⁶。特に当時、人口は極めて少ない「全民皆兵」の遊牧モンゴリアにとって、男性がほとんど出征する中で、後方に残る女性の果たした役割は想像しやすいであろう。

古代モンゴル社会にとって、起源、盛隆、衰退の全期に渡って、貴族・王ハン家系の女性たちは政治文化などに高度に参加しており、民間家庭内でのモンゴル女性も同時代の儒教の説く「男尊女卑」の世界観よりは高い地位を持っていた。ゆえに、教育においても女性は重要な役割を果たしていた。その象徴的な逸話としてはテムジンの母のホルホンが未亡人として幼いテムジン兄弟七人を育てるために一人で苦難を乗り越え、彼らの教育をも担っていた物語が有名である¹⁷。それに、先述アロンゴワの五人の息子を教育した物語も、現在は教科書に乗る

ほどモンゴル人に知られている¹⁸。

古代のモンゴルでは女性がこどもの教育の主役を担っており、「父の言葉は金のごとく、母の教育は宝に等しい」という諺が残っている¹⁹。

2、遊牧・農耕の接触期（14c～19c まで）

(1) モンゴル帝国期の教育

モンゴルの歴史と文化には三つの大きな要素がある。一つ目は、遊牧と狩猟を根源にする文化、二つ目は、戦争の歴史、そして三つ目は、チンギス・ハーン（、名はボルジギン氏のテムジンであり、以下はテムジンと称す）である。モンゴルの文化と歴史、あるいは教育などを研究するにはテムジンは避けられない人物である。彼による征服と戦争について、現代的な世界観では批判的な立場でとらえられがちであるが、モンゴルの蜂起により、世界の歴史や社会の変動を後押ししたのも事実であった。

モンゴルという国家的な集団はテムジンがモンゴル各部を統一し、13世紀の初頭にモンゴル帝国を立ててからになる。テムジンの教育内容を整理すると、一、文字の創出と普及や言語の統一の重視。二、生産生活と軍事・技術教育の一体化の重視。三、モンゴル人の道徳・慣習・啓蒙教育と法律や政治との結合。四、上述すべてが一体化していることである。テムジンは自民族のために、ウイグル文字をもとに、縦書きに変換したウイグル型モンゴル旧文字を作らせ、教育の推進にも努めた。

テムジンの教育観念は、一士族国家の創出者としての広義的な概念として理解すべきである。文字と行政システムが未発達であった800年前のモンゴル高原では、テムジンの教育観念は口頭での訓戒として伝達された。内容は主に、政治、軍事と行政面であったが、モンゴル人に対する道徳と律法などの勸戒も多く含まれていた。

親孝行についてテムジンは「親愛な母の恩情を忘れ、不孝な言葉で母を傷つけると、後悔しても遅い。生んで育ててくれた母の恩情を忘れ、きつい言葉で母の心を傷つけるならば、母の笑顔を永遠に失う²⁰。」との言葉を残している。

臣下と子孫には「わが子よ、今後は気をつけよう。万難を経て立てた功績は、慎んで守らんと、崩壊は瞬時のことだ²¹。」とも言い残した。

ある時行われた「囲獵」で、8歳だったクビライ（元太祖）が初の兎を捕獲したことを祝い、テムジンはクビライの親指に油を塗って祝福したという²²。この史話にはくつかのモンゴルやテムジンの教育の要素がうかがわれる。まず遊牧モンゴルにとっては、狩猟自体は軍事訓練の重要な一環となっていた。一方で、テムジンが定め

た『大札撒』（大律法）では囲獵は楽しみのための無断の虐殺であってはいけない。必ず決まった範囲と季節（冬）に行われるべしときめられ、水源と牧草も守るべきという自然保護の意識も含まれていたのである²³。

(2) 元朝下の教育

モンゴル帝国の意志を引き継いだ元朝は、蒙漢文化と教育の交流が大いに発展した時代である。クビライが中国を統一したあとに、漢族の政治と文化、教育制度を受け入れながら、モンゴルの文化と教育の遂行と発展にも努めていく。元朝の教育制度の象徴は「端本堂」の教育であった²⁴。それは主に皇子の教育を目的にしていたが、結果的には王朝の統治を強固させ、漢地での政権を継続させるために漢式の教育制度を取り入れたことである。具体的には「太子太師」などの職と専門部署を作り、教員の採取も官人だけでなく民間からも多く採用していた。しかも教員の種族も多様で、漢人、モンゴル人、チベット人、色目人など様々だった。しかも漢文化の「尊師重道」の文化がモンゴル人の子弟に広がっていた。

授業内容も「四書五経」と歴史知識だけにとどまらず、軍事、政治、体育、自然科学と宗教まで広く関わっていた。中央では学校制度を作り、モンゴル人子弟だけではなく、各国、各族の学生を受け入れ、授業には、蒙・漢さらには、チベット・ウイグルなどの言語を併用していた。その授業内容は文化、政治だけにとどまらず、戦争、医学、文芸まで幅広く行われていた²⁵。地方のモンゴル人教育と文化の遂行には「モンゴル学校」を各中書省、路、府、州、県につくらせ、上述の学業内容を蒙漢両言語で行っていた。その結果、モンゴル語に堪能の漢族が増えていき、モンゴル人は自分の文字言語を保ちつつ、漢語での交流も普及していった。当時の官方言語であったモンゴル語と漢語での行政の推進は積極的な役割を果たしていた²⁶。

モンゴル子弟学校の始まりはテムジンが金を滅ぼし、ここを燕京（今の北京）と名付けた頃からすでに始まった推測されているが、テムジンの息子ウゴタイ（在位1229～1241）はそれを受けつぎつつさらに発展させた²⁷。

漢（前206～後220）以来の皇帝に経書を講義する「経筵の席」を元朝も継承した。主に漢地の統治を強化するためであったが一方で、モンゴルの帝王と貴族にとっては中原文化と教育を受けるきっかけになっていた。モンゴルの帝王にとっては、儒教思想の「修身、齐家、治国、平天下」の教育にもなっていた。元朝初期からすでに経筵の専門管理職を設け、「翰林国史院」、「モンゴル学士院」などに管理されていた。中後期にこのような管理システムは次第に発展し膨張していった。

経筵の主な義務は皇帝と皇子に講義するうえで、勸戒

することであった。教授内容は主に「四書五経」を基本に、古代の名作をも洗練し、講義を開き、史訓でよい皇帝になる経験を教えていた。皇帝に対する講義は蒙漢両言語で行われていた。それは状況によって変動し、漢語の通じる皇帝には直接漢語で講義をしていた。それに、漢人の大臣なかでは、官方用語であったモンゴル語に通じる人は次第に増えていった。逆にモンゴル族大臣も皇帝の影響もあって、漢文化を受け入れ学ぶ人が増えて行き、民間にも広がっていった。元史では「1244年にクビライ皇帝が宮殿にて、四海の大業を考え、属地の旧臣や文章に貫通した各地の有識者を集め、治世の方法を訊ねた。」と記されている²⁸。

以上のような教育は、元朝の多民族的特徴を現しており、民族間の交流を促し、今のモンゴルの伝統的な教育文化の形成に影響を残したと考える。

元朝の統治者は漢民族の文化教育と政治制度を取り入れると同時に、自民族の文化に基づく教育も非常に重視していた。その象徴としては各行書や路に建てられたモンゴル語学校である²⁹。モンゴル族だけでなく、他の民族の人々も受け入れていた。教師と生徒の構成は多民族でありながら、新「パスパ」文字を使用していた。貴族官人の子供だけでなく庶民の子供も大いに受け入れていた。そのためモンゴル語に通じた漢人や他民族の文化人が増え、モンゴル語を学ぶ風尚が広がっていった。漢地に移住したモンゴル人は次第に漢文化の生活スタイルに変貌し、漢語を話し次第に漢化した反面、漢族の人々はモンゴルで話すのを風尚にしたり、モンゴルの服を着ることもしばしばあった。さらに元の亡滅後に、明朝の学校制度と文化にまでに影響が及んだのであった³⁰。

これらの証拠として残っているのは北京故宫博物院にある蒙漢両言語で書かれた『孝経』(ᠬᠠᠭᠠᠨᠠᠵᠢᠨ)である。『孝経』は中国古典の十三経の一つであり、孔子が曾子に孝について論述する形式をとっている。はじめは孝の概念をまとめたうえで、天子から庶民に至るまで孝のあり方を詳説し、最後は孝の用を述べている³¹。

上述のように様々な分野で元の朝廷は教育を推進していたが、最も重要な科挙制度を元の初期には廃止していた。主にモンゴル貴族子弟の出世を確保するためであったと考えられる。それは同じ職での競争上も様々な制度の壁を作り、競争力の低いモンゴル貴族子弟を保護していたことに現れている。従来の科挙制度を遂行すればモンゴル貴族子弟は漢族と競争できないのが確実であった。元の中期中に入ってやっと科挙制度は復活され、三年に一度の実施と定めていた³²。

元の朝廷は、他分野の教育にも関心が高かった。モンゴルと元では戦争は長年継続し、戦乱による病気の伝染もあった。それを解決するため、元の朝廷は医学の教育

を非常に重視した。首都では「太医院」があり、各地方に医学校を設け、頻繁に試験を行っていたことから医療を重視した一端がうかがえる。その時代にモンゴルの伝統的な家庭医学も発展を見せた。それに、元はモンゴル帝国の一部として拡張と上昇期にあたり、モンゴル族も古来音楽と舞踏を好むことに加え、政権の宣伝をねらい、音楽と舞踏の教育を重視し、専門管理機構と職をも設けていた³³。

元は騎馬民族の出身であったが、中原統治が始まると長年の戦乱による農産業の破壊問題に直面し、農業とその教育の重要性に気づくこととなった、クビライは『農桑輯要』を編纂させ、配布した。さらに、元は官方と民間をの力を促し、定期的な農業技術の講義と指導を行っていた³⁴。

軍事力で立国した元が軍事とその教育を重視するのは必然であった。モンゴル伝統的な価値観である、英雄主義と忍耐力や団結などの教育を第一にしていた。また、飲食、移動、作戦の教育と訓練は頻繁に行われ、女性にまでさせていた。軍事理論と軍事技術の応用も非常に重視されていた。それはもちろんモンゴル騎兵中心に行われていたが南宋や日本との戦争があったゆえに、水兵の訓練と教育も行われた³⁵。

(3) 他のハン国の教育

テムジンは征服した土地を息子たちに分け、皇子たちの統治による各ハン国が形成された。その後、武力中心で、政治的な経験のないモンゴル人たちは各自の支配地で統治を始め、その地の政治と文化に融合し、安定した局面が次第に表れた。その代表となるのは、西アラブ世界を基盤に建国したテムジンの六代目の孫となるイルハン国の七代目の君主のガザン(ハサン、合贊、ᠭᠠᠵᠠᠨ)ハンの異文化における文化と教育的な改革である。文字さえ読めなかったテムジンと比べて、次世代のモンゴル人皇帝として、多文化と多領域を横断する知識に優れていた。

ガザンが五歳になると宮廷教育が始まり、牙魯黒という漢人を彼の教師に選ばれた。さらに、モンゴル語とウイグル語の教師を招き、言語を教えるとともに文理の知識を教わった。ガザンは5年間でこれらの知識を習得した後、騎馬、弓矢、モンゴル相撲も身に着けた。そのお陰でガザンは他国語をわかるようになっただけでなく、モンゴルの伝統的な文化に加え、豊富な文理学の知識を身に着けた。その後ガザンは、施政上、軍事上の功績を残し、『史集』の編纂を命じ、文化教育も重視し、特に文化教育と技術などの東西の交流を大いに促した。

彼の幼少期に彼の実の母と同行してきたある漢族の妻の莫合勒臣(乳母、ᠮᠤᠬᠡᠯᠡᠴᠢᠨ)がいた。当時のモンゴル皇室

と貴族なかではこのような乳母制度があり、それが後の満州族貴族にも偶然的ながら存在していた。それについてここでは詳述はさけるが、このような事情を提起することでモンゴルと北方民族間の文化と教育上の関係性を推測したいのである。

先述したようにガザンは優れた知識を持っていた。彼の生きた時代はモンゴルによる戦争で西と東の交流が盛んになっていた時である。西アラブにいたモンゴル人貴族として、彼はヨーロッパ、アラブ、中国などの文化と技術に触れる機会が多かった。もちろん伝統的モンゴル文化の教育を受けることも重要な一環になっていた。恐らくは、彼だけでなく、他のハン国でもこのようなことはあったと想像できる。

ガザンの受けた教育と実行した教育策は以、下のようにとまとめられる。彼の受けた教育の形式の第一は伝統的なモンゴルの家庭を主とする教育であった。もちろん幼少期にあった乳母の影響も無視できないが、彼の皇母であったホトコ（*Hotoko*）によるモンゴル伝統的な価値観や知識が最も深い影響を与えたと考えられる。ホトコについては記述はすくないが、教養のある女性だったのは確実で、ガザンに対する教育にも反映されたと考えられる。ガザンの爺であったアバガ・ハンも彼を非常に愛護してして、彼の父に「この子を朕のそばに置き、朕が育てる」といい、ガザン

の教育の責任を受け持ったことなどもガザンにとってはモンゴル伝統な家庭教育の機会になっていた³⁶。

(4) 明・清時代のモンゴルの教育 (14c ~ 19c)

1368年、朱元璋が明朝を建国し³⁷、元は北の草原地帯に退去し、以後北元³⁸として漢族政権の明朝と300年の対立が続いた³⁹。元の統治の後遺症や明の鎖国策により、結果的に、モンゴルと中原文明との交流は減少し、中原文明の影響は次第に弱まった。もちろんモンゴルの教育の中原文明化もこの時期は停滞した⁴⁰。

長年の戦乱と遊牧文化の特徴が原因だと考えられるが、北元に関する教育の史料はほとんど残っておらず、先行研究もまだ出現していない。ただ、戦争と同時に、双方の貿易による交流や漢族農民の長城をこえるモンゴル開墾も途絶えなかったことも述べておきたい。

明朝が滅ぶと（1644）、北方騎馬民族出身の清朝が再度中国を統一をする。モンゴルも支配下に収めると⁴¹、モンゴル八旗制度が定められ、満州族を仲介する漢文化と教育がモンゴル人にも及んでいた⁴²。清朝（1616 ~ 191）は元・明の「国子監」などの教育制度を受けつぎ、満州八旗の子弟と蒙漢両族の学生たちを育てていた。またも四書五経を基礎とし、満・蒙・漢・蔵などの多言語が使われていた。さらに数学やロシア語の専門的な学校も作られた。

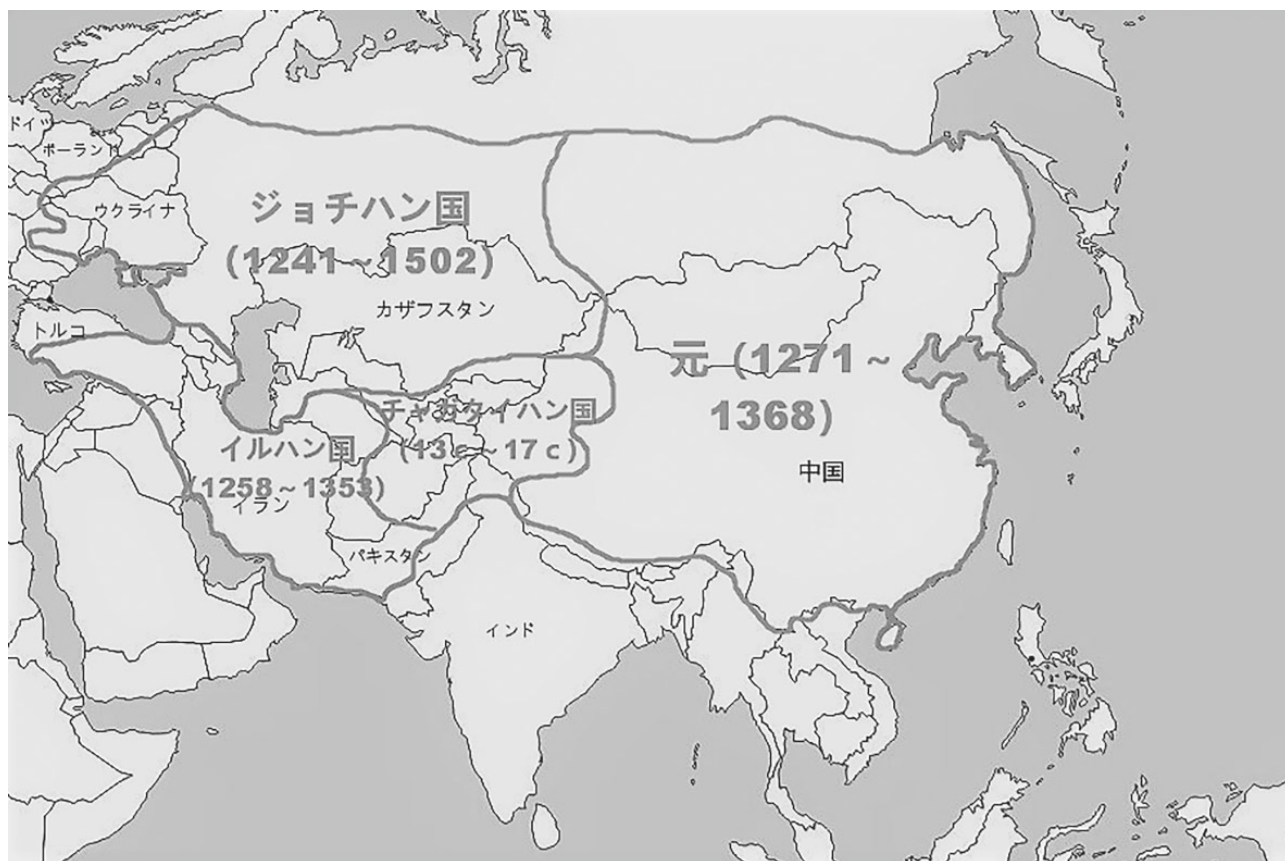


図1、13世紀末のモンゴル帝国。筆者製図。

清朝は満州八旗子弟学園をモンゴル八旗にも遂行させ、モンゴル人学生を育てていた。それは主に内モンゴル西の帰綏（現在フフホト市）、中国の東方北地方、現在の内モンゴル東部となる三つのエリアで行われていた。学習内容も上述の四書五経をベースに、満・蒙・漢三言語の教育であった。清朝によるモンゴル語・ラマ教の推進で、寺院も教育の現場となり、学校にはラマ教師が出現するようになった。

行政組織をより具体的にいうと、清朝は前朝の京城（北京）の北国子学校を改正し、清の国子学校を設立し、中には満・蒙・漢の学生が学んでいた。その後次第に規模を広げ、京城におけるモンゴル八旗子弟学校が作られただけでなく、盛京（瀋陽）、順天府、黒竜江、吉林、熱河、綏遠（フフホト）各地にもモンゴル八旗子弟学校が設立された。さらに、モンゴルの本拠地における、各旗のモンゴル子弟学校を多く作らせた。

清の太宗ホンタイジ（在位 1626～1643）の時代からモンゴル八旗に独自の試験制度がすでに始まっていた。試験の方法と制度は明朝の制度を応用し、内容も四書五経をベースにした論文や口述試験であった。初期では漢文のわかるモンゴル受験生に漢文を訳させ、漢文のわからないものをモンゴル語及び、満文で受験させていた（モンゴル語と満州語の共通性もあり、モンゴルと満文で受験するのはある種の優遇策であった）。

しかし試験規制は次第に厳しくなり、漢族と同じ受験内容が求められるようになった。全体から見ると漢地に比べて、モンゴルと満州族の合格率ははるかに高かったが、これは元朝に学んだ優遇策にくわえ、漢地との受験者数の大差にも関係がある。試験は三年に一度行われ、一等は状元と称し、二等は探花に、三等を榜眼と分けられた。一等は三名で、等級が下がるにつれ、人数は増えるシステムになっていた⁴³。

それに、試験の実施には、モンゴル人の監督官を派遣し、管理させていた。清朝におけるモンゴル八旗受験生の統計として、王風雷氏の研究統計は重要な意味を持っている。彼の統計によると、前三等までに合格し、進士資格を得られたものは177名だった⁴⁴。

モンゴル八旗に与えられたもう一つの試験内容は軍事試験であった。受験者は騎射の試験、重器使用や気力試験に、『孫子兵法』などによる筆記試験も欠かせなかった。また、清朝はモンゴルと満州八旗の子弟に対して蒙・満・漢語の相互となる翻訳試験も別に設けていたのも多民族政権の統治上の必要性であった。清末は辺境地になっていた外モンゴルでの漢語の普及も進められ、世界情勢の変化により、モンゴル八旗の学校の中には、日本語を教えるところも現れていた。

これらによって、大勢のモンゴル人は清朝廷に加入し、

モンゴル人有識者として清の政治と軍事に活躍していた。それはもちろんモンゴル地方の文化と教育の発展と同時に漢化へとつながって行った。その典型的な人物として、清末モンゴル文人である恩華がいる。一生をかけ、清代の蒙・満・漢八旗子弟の創作した作文、書籍を集め、『八旗芸文編目』⁴⁵を編纂した彼の業績は、清朝におけるモンゴル族文化人やその教育の発展成果を研究する上でも大きな意味を持っている。

いわば元朝からはじまった遊牧と農耕文化の接触は、一時明朝によって切断されたが、清朝になって再び満州族を介して復活し、さらなる発展をみたのである⁴⁶。

3、遊牧・農耕の融合期

(1) 清末・民国（20c～1947）

モンゴルの近代教育の発展の経過を整理するには中国を背景とする教育の発展史を把握しなくてはならない。それは留学の歴史であり、清末の留学生派遣を起点とする。清朝の衰退は乾隆の盛期からすでに始まったとの説がある。帝国末期の膏肓が現れたのは西太后の主政期であった。太平軍と義和団の乱に加え、列強の圧迫で清の朝廷は政治の基盤を失っていった。清末に、改革の動きはいくつか現れ、洋務派と立憲派や革命派に分かれていた。洋務派は「東体西用」を前提とし、現存の制度は変えずに、西洋伝来の科学技術のみを取り入れ強国化を図ろうとした。立憲派は日本の明治維新を鏡に、制度的な改革も視野に入れていた。孫文を代表とする革命派は民主国家を目指していた。留学と教育の改革はその重要な一環になっていた。

最初の留学推進者は、広東沿海出身の容闈であった。彼の『西学漸記』⁴⁷はよく知られている。貧困の出身であったが、アメリカ人のブラウン（brown）の助力を得て、1847年の18歳でアメリカに渡り、7年間の勉強を経て1854年に帰朝した。帰国して間もなく、アメリカで教育を受けた容闈はキリストを掲げる太平軍を訪れる。しかし、農民軍の乱暴な行動を見て、救国の希望を当時の洋務派高官の曾国藩に委ねた。曾国藩に重用され、120名の学童をアメリカに15年間留学させるプロジェクトを実行した。彼は一貫して洋務運動と教育事業に尽力したが、洋務運動の失敗に伴い、アメリカに移住し、民国建国の1912年に移住先で没した。

日清・日露戦争以降の19c末期から20c初期には、日本への留学が増加した。その中にはモンゴル地方出身の中国人留学生もいた⁴⁸。旧日本軍が樹立した満州国領に入っていた蒙東地方から多数のモンゴル人の留学生が日本に渡航していた。

辛亥革命（1912）以降、孫文は「五族共和」を唱え、

漢、満、蒙、回、蔵の五つの民族とそれに属する地域は一つの国となり、それまでの帝制を共和制に変えようとしていた。孫文の思想は次第に広がり、梁起超の中国全民族を包括する「中華民族」概念と合流し、中国の民族観の主流となった。

清末・民国に内モンゴルでの教育近代化に務めた一人の代表的な人物は、赤峰地域のハラチン西旗（喀喇沁、ᠬᠠᠷᠠᠴᠢᠨ）の親王であったグンサンノルブ（1898年に継位、貢桑諾爾布、ᠭᠤᠨᠰᠠᠨᠨᠣᠷᠪᠤ）である。清朝によるモンゴリア教育の推進により、彼は伝統的な儒教思想のもとで育った。清末の朝廷は衰退防止の一策として、モンゴル地方の教育近代化を推進していた。洋務運動と西洋文化の伝来を背景に、日本見学にまで出たのであった。彼は学校を作り、江南地方などから漢地の教員を招くだけでなく、日本からも招請していた。彼は人間の平等性を強調し、学校に貧民の子供を積極的にいれ、女子学校まで作った⁴⁹。

その影響を受け、ヘーシingerを代表とする一連のモンゴル知識人が近代に現れて、清朝の旧制度と風習を受けつぎながら教育と政治の改革を計ってきた。民国期における内モンゴルの政治勢力は主に西の綏遠省の傅作義がリードする国民軍と、東の、日本と満州国が後ろ盾になっていた徳王（ᠳᠡᠭᠦ᠋ᠰᠡ᠋ᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭ）と李守信（ᠯᠢᠰᠤᠰᠢᠨ）の勢力の対抗であった⁵⁰。

自治区西の民国勢力下の地方では清末新政の基礎を得て、洋式の教育を積極的に取り入れた。特に、満州国の治下だった興安などでは、モンゴル人親和策の影響を受け、教育の近代化は急速に発展した⁵¹。

先述の傅作義は内モンゴルの西地域で初の中学校を建てており（包頭中学校）、それは中華人民共和国以降も大いに発展し、現在は高中を含め、数千人の重点的な中学校になっている。東地域では旧満州国の力を借りて、モンゴル族の学校が多く作られており、現在の中華人民共和国へ至る基礎となった。

(2) 現代（1947～現在）

内モンゴル自治区は第二次世界大戦直後の中国国共内戦の真っ最中に東のウランホトで成立し（1947）、中華人民共和国の成立（1949）よりも2年早かった。最初は東西南北の各勢力に分割され、統一はされていなかった。1954年に首府を今のフフホトに移転したことで事実上の統一を果たしたが、中華人民共和国建国5年目のことになる。それでも、旧モンゴル王宮貴族の勢力は残留したままだった。それに、清末にはじまった漢族人口の流入は増進し、漢語が主要言語になるまでに拡大した⁵²。

中華人民共和国の初期は民国期の成果を一時踏襲したものの、間もなく、ソ連を全般に学ぶ方向に舵をとった。自治区の成立した時点では民国期の基礎があって、モン

ゴル族人口83.2万人に対し、民族小学校（主にモンゴル族を指す）は377か所、在学生人数は2.26万名であった。民族中学校は4か所に、生徒数は524名しかいなかった。1949年になると全自治区の民族小学校は757か所、生徒数4.9万人になり、民族中学校は10か所に増え、学生数は905名になっていた。自治区成立の10年後の1957年には、高等学校3箇所、中等学校は105箇所、小学校が1947年時の5.5倍数になっている。その中であって、モンゴル族中学校は14箇所、モンゴル族中小学生は12万人、70%の牧区の学齢児童が入学することができた。全自治区の学校に在籍するモンゴル族の専任教師は4700名となっており、大学の講師と助教は64名になっていた⁵³。

筆者の研究対象である内モンゴルの美術教育も、清末の黎明期と民国の芽生期を経て発足していた。先述の独特な地域の歴史と文化背景の中、内モンゴル師範大学美術学院の成立（1954）をシンボルに、美術教育も次第に体系化していった。しかし、それも一連の社会主義運動の中、発展が安易なものではなかった⁵⁴。

中華人民共和国建国初期は経済の回復と政治の安定を計ったが、朝鮮戦争（1950～1953）、反右派運動（1957）、大躍進（1958～1961）、文化大革命（1966～1976）など一連の波乱の中、列強を追い抜くとの初期の目標は破滅し、経済・文化の発展と衰退を伴う不安定な時期が長く続いた。特に反右運動と文化大革命は教育の発展に大きなダメージを与えた。

内モンゴルもこれらの波乱に強く影響されたが、まだ漢族移民と総人口の少ない辺境自治区であったため、政治の中心圏ほどではなかった。内モンゴルの教育事業も社会主義計画経済などの行政力の下で規模を次第に拡大し、ソ連の形式を学ぶことで体系化していった。だが改革開放（1978）が始まるまで、教育事業も挫折と衰退の繰り返しであった。このうち、美術教育の発展と師範大学美術学院の成立には、地元出身の、北京と上海や日本などでの学習歴をもった画家たちが多大の貢献を果たした。また、政治の混乱から逃れ、辺境支援で内モンゴルにきた画家たちも重要な役割を担った。

1976年～1994年は教育の回復期であり、1976年に終焉を迎えた文化大革命の直後、1978年の改革開放以降、次第に回復し始めた。一連の政治的な舵の取り直しによって、1994年に開かれた全国教育工作会议によって、九年義務教育と識字率の普及が最重要視され、経済的な発展も教育の復活を後押しした。

1994年～2000年の教育は発展期にはいっており、今世紀になってから中国経済の高度な成長や「拡招」（生徒募集数の拡大）、「自主経営」（国公立学校の経営化管理を認めたが、当時のアジア金融危機と洪水などによる財政の乏しさも裏にあった）、「民営化」（民営教育の認可と促進）

など一連の解放的な国策を打ち出したことで、全国と内モンゴルの教育は史上例のない急速な発展を見せた⁵⁵。

2015 年になると、モンゴル族在学生の割合が、モンゴル族が占める人口比率の 17.6% をすべて上回っており、幼稚園 23.33%、小学校 25.85%、中学校 24.52%、普通高校 26.65%、職業高校 24.39%、大学は 22.68% になっている⁵⁶。

そして、現在の内モンゴルの教育制度は、日本などの西洋制度導入国の教育体制を学ぶ改革開放以降の中国の制度下に定着している。教育の管理機構として中央には教育部とそれに統轄される教育庁、局などが設けられている。しかし中国政府のすべてを制御したがる制度的な足枷によって、教育に関する民間 NPO 組織の発展は大いに制限されている。学校制度も日本のように、大、専、高、中、小、幼ができており、経済が発展した近年は日本の保育園制度を導入するような動きも見られる。教育手法も日本と極端の差異はないが、すべてが政治を優先に置く考え方では教育をする側とされる側の自由度は非常に欠けている。

内モンゴルの美術教育も上述の制度化と経済の発展の下で氾濫となるほどに膨らんだ。筆者の現段階での調査によると、専門学校以上となる美術関係の在学者数は 1700 ～ 20000 名であり、今後の調査の具体化によって数値拡大の余地は大いに含まれている。専攻設置もあらゆる面を横断しており、絵画領域からデザインに、建築設計専門など多種多様である。美術教育の小中高への普及は概ね実現しているが、授業の軽視と時間数の不足などの問題を抱えている⁵⁷。

現在、中国と内モンゴルはグローバル化する世界の一部として経済と文化と教育が想像を超える速さで変貌している。まだ解放の窓口は全開していないが、インターネットメディアの発展によって情報交換はより容易になり、人々の世界観は大きく変化している。

日本人にもよく知られているが、1980 年代以降中国からの留学生は大幅に増加しており、その現状は現在まで続いている。内モンゴルは、旧満州国が接点となったこともあり、日本へのモンゴル留学生は最も多いのである。その反面、外国から中国と内モンゴルにくる留学生も少しずつ増えている。これらの根底には人と人とのコミュニケーションの激増と深化がある。そして、文化の受容は教育の変貌にも影響を与え、内モンゴルは教育伝統を守りつつ、現代的な教育理念を積極的に取り入れようとしている現状である。内モンゴルの現代教育を成立させ推進していくことが現在の急務となっている。

おわりに

筆者の研究のテーマの最大の目標は内モンゴルの美術教育における新たな思考法の提案である。本稿ではその基礎研究の一環として、モンゴルの伝統的な文化と教育について考察した。原始土族時代から始まる家族教育からモンゴル帝国期の古代学校教育には、先行する北方民族との共通性ととともに、独自の面も認められた。

さらに元代になると、中央漢民族文化の影響で儒教の教育を受け入れていた。漢文化の影響は、明朝の停滞を経て清朝になると再び復活し強化されていった。

本論を通じて、モンゴル族の教育伝統は家庭教育の重視、軍事と団結教育の強調、テムジンの教育観念の大きな影響や漢文化の摂取を経て近代の西洋教育制度の影響へと及んでいることが理解されたが、このような多様性が、ほかの北方民族と比較してモンゴルの独自性をも形成している。

本論の研究対象である内モンゴルはモンゴル族の伝統が濃い一方で、清末から現在までに、漢民族人口が大量に入ってきている。現在は漢族を主体とする状況下であり、家庭教育にも漢民族文化の影響を強く受けている⁵⁸。つまり、中国伝統的な家庭教育文化の「忠・孝・礼・義・廉・恥」と「出則弟、入則孝」の思想が現代のモンゴル人の家庭にも影響しており、いわゆる儒教文化の伝統が現在の内モンゴルにも根をさしている。

現代中国になって、内モンゴルは自治区となり、漢民族の文化や美術などもその時点から半強制的に導入されたように思われがちだが、実際には長い歴史的背景があって、現代の内モンゴルの文化状況が成立したことを明らかにできたと考える。

一方、このような状況は新たな問題を生じさせてもいる。総じて、モンゴルの伝統的な教育においては家庭教育は主な役割りを果たしてきた。つまり、伝統と家庭教育は不即不離の関係である。しかし近年、経済と文化が大きく発展した内モンゴルのモンゴル人社会の家庭にとって、漢民族と西洋文化などの外部からの影響は従来に比べ著しく大きくなり、自民族の教育文化は外部からの影響下で変貌を見せつつある⁵⁹。

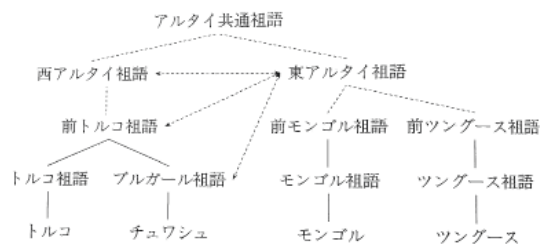
例えば、こどもの教育において、自主性、独立性、創造性や平等性などが強調されるようになっており、伝統的な価値観との齟齬を持ちながら融合も進んでいる。伝統文化についても、内モンゴルは独自のモンゴル族の文化を有しているのだが、人口の大多数の割合を占めている漢民族の言葉、美術、儒・仏・道の思想も存在しており、モンゴル族文化に大きな衝撃と影響を与えている⁶⁰。

このような状況にあって、文化伝統を守りつつ、創造的な美術教育を行っていくには、全民族の伝統文化に向

けて、保護と推進的政策を採用し、美術教育の研究上も伝統を掘り下げ、日本などの先発国や、東西融合の先行事例と比較しながら進めていくべきと考える。

注

- 1 内モンゴル自治区公式サイト、<http://www.nmg.gov.cn/col/col4191/index.html> では「内モンゴル自治区は、中国北部辺境に位置し、東西は 2400km、南北は 1700km、面積は 118.3 万 km² に及ぶ。自治区にモンゴル、漢、満、回、朝鮮など 55 の民族が住み、総人口は 2528 万人である。」と記述する。フフホト市政府公式サイト、<http://www.huhhot.gov.cn/> では「首府であるフフホトは、青い町の意味で、東経 110° 46' ～ 112° 10'、北緯 40° 51' ～ 41° 8'、自治区西部に位置し、総面積は 1.72 万 km² で、建成面積が 230 km²、人口は 300 万、海拔標高は 1050m の高原気候である。2300 年前より城市が作られ、戦国時期（前 475 ～ 前 221）の趙国の雲中郡、秦漢時代（前 221 ～ 220）の秦雲中郡と漢（前 202 ～ 220）の雲中と定襄郡、魏晉南北朝（220 ～ 581）の雲中と盛樂、明清時代（1368 ～ 1911）の明東勝諸衛地とモンゴルのトゥメト部領地と清の山西綏遠道などに属し、民国時代の 1928 年に綏遠省を設立した際、綏遠市となった。その後、中華人民共和国になって、1954 年に綏遠省が内モンゴル自治区の管轄地となり、綏遠市はフフホトと改称し、自治区の首府となる。」と記録している。
- 2 拙稿「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在－蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから－」（『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』63 号、2019 年）。
- 3 陳忠勇等編著『中国民族教育發展報告 2017 内モンゴル篇』（社会文献出版社、2017 年、2 頁）。
- 4 王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（内蒙古教育出版社、フフホト、2016 年）。王風雷、勝利「論成吉思汗教育理念與實踐」（『内蒙古社會科學雜誌』、1997 年第 6 期）。
- 5 那順巴圖「成吉思汗的教育思想」（『内蒙古大学学报、哲学社会科学版』、1992 年、01 期）。
- 6 張碧波、董国亮主編『中国古代北方民族文化史（上下）』（黒龍江人民出版社、2001 年）。
- 7 アルタイ語の同源性については、まだ争論が続いており、池田哲郎氏『アルタイ語の話』（大学書林出版、2000 年 2、3、204 頁）では「ユーラシア大陸の中央から北方にかけて、三つの民族が暮らしている。すなわち、トルコ、モンゴル、ツングースの人々である。その三つの民族や言語をまとめた概念がアルタイである〔～中略～〕アルタイの三言語は共通祖語に帰結させてもおかしくない。それほど似ている。個々には問題があるので、疑問視する声さえある。ニューヨークには 7 つの言語を学術レベルであやつる学者がいた。コロンビア大学のアウステルリッツである。彼は「共通祖語があったとしても、はるか昔に違いない。だから、アルタイ説は無理だ」、という意見であった。納得である、ただ一点を除いて。彼は抽象論に終始していた〔～中略～〕では、かりにアルタイ共通祖語が存在したなら、その系統樹はどうなっているのか？そこで系統樹を示す。実線は確定部分である。点線の箇所は未解決である。矢印点線の部分は接触関係である。」と研究成果を示している。



出典：注 7 前掲、池田哲郎『アルタイ語の話』204 頁。

また、孟達来氏は『阿爾泰諸語言共通性的形成与北方民族の歴史接触』（中国社会科学出版社、北京、2001 年、151 頁）の結語では「アルタイ諸言語の共通性についての争論は二世紀も続いた。多世代の学者たちが引き続き研究の中でアルタイ諸言語の語源の関係性及び發展過程を解釈するために努力をかけてきた。特に文法システムの類似性及び発音の対照議論に関して大きな成果をあげられている。アルタイ三語族の語源関係について、「親縁論」や「接触論」との論争は続いているが、いまだに合意は見られない。しかし長年の論争と研究の結果、双方に認められた視点は生き残った。それは、突厥、モンゴル、ツングースの言語的共通性を認め一類似性と対応現象の存在を認識した。これらの言語は早期の段階において接触があったことを認めた。これらは「アルタイ論」と「反アルタイ論」の共通のところでもある」と論じている。

- 8 『内蒙古歴史文化叢書・中国古代少数民族史新論』（内蒙古人民出版社、1993）の 8 頁で、林干氏は「中国古代北方民族はその言語文化、族源、所属、経済の類型、風俗習慣と活動地域などによって大体五つ、あるいは三つの系統に分けられる。広義的には古代北方民族とは東北、大漠南北と西北などに活動していた民族を指し、以下五つ系統に分けられる。1、匈奴系統：匈奴、北匈奴、南匈奴、屠各、戸水胡、鉄弗。2、突厥系統：丁零、高車（敕勒）、鉄勒、突厥、回纥（回鶻）薛延、黠戛斯、畏兀兒。3、東胡系統：東胡、烏桓、鮮卑、柔然、庫莫奚、室韋、蒙古。4、肅慎系統：肅慎、挹婁、勿吉、靺鞨、女真、滿州族。5、西域各族。」と論じている。さらに、注 6 前掲、張碧波、董国亮主編『中国古代北方民族文化史、上』13 ～ 14 頁では「古代文献と民族学や考古学などの資料によれば、我が国の古代北方民族を 1、肅慎系統：挹婁、勿吉、靺鞨、女真—滿州族、赫哲、鄂溫克、鄂倫春。2、夫餘系統：沃沮、夫餘、高句麗。3、東胡系統：烏桓、鮮卑、柔然、室韋、契丹、奚、モンゴル、達斡爾、錫伯。4、匈奴系統：匈奴及び烏孫、月氏など西域の諸胡族。5、突厥系統：丁零、刺勒、突厥、回紇—回鶻—畏兀兒。6、氏、羌系統：吐谷渾、党項と分けられる。これによれば、我が国の北方民族は多元的であり、多元的な發展の中で統一的になってきた。例えば、戎狄は商周時代から、匈奴は秦漢より、鮮卑は魏晉南北朝から、突厥は隋・唐時代から、契丹と女真是兩宋から、モンゴル族は元代から、滿州族は清朝から端を発している。中国古代北方文化の發展史から見ても、北方の文化系統を形成の過程に、中原農耕文化と対峙する草原遊牧文化圏を形成していった。さらに、この草原文化圏をそれぞれの自然と地理的な条件などの制約によって、いくつかのお互いに関係し、区別もされるべき地域の文化圏に区分することができる。例えば、東北アジア文化圏（東北三省、内モンゴルの東北部〔筆者の出身エリア〕と西部）、海岱文化圏（渤海灣、山東半島、河北省北部及び、北京、天津あたり）、モンゴル高原文化圏（山西省西部、陝西省北部、内モンゴル自治区、寧夏自治区）、西部黄土高原文化圏（甘肅省、青海省、新疆及び西域地域）などに分けられる。そして、北方文化圏はお互い影響しあい、滲み込みながら中原

- 農耕文化とも絶えることなく接触、会合、交流と融合が進んできた。この二つの文化圏の対峙と交流及び融合は中華文化に決定的な影響を与えており、世界文化にも影響を及ぼしたのであろう。しかし、我が国の北方民族の史料は少数民族の極めて少ない民族列伝に残っており、文化史研究に関するものはさらに稀であることは一つの現実として認識すべき問題でもある。専論になっているのは、草原遊牧地帯と中原農耕地帯の接着地域の地理と風俗及び文化についての簡略な記述しかないが、北方の風習は窺え、南北間の文化的な融合後の文化の変異も見られる。」と述べている。
- 9 注6前掲、張碧波、董国堯主編『中国古代北方民族文化史、上』（黒龍江人民出版社、2001年1557～1569頁）。ウンビリゴ「モンゴル族の伝統的家庭教育」（内蒙古社会科学院、『中国蒙古学』、双月刊、第46巻、総第276期、中国蒙古学編纂部出版、フフホト、2018年3月15日発行、74頁）。ジャ・バト「モンゴル族家庭教育の重要性について」（内蒙古自治区教育厅、『内蒙古教育、A版』、2017年第3期63頁）。
- 10 注6前掲、張碧波、董国堯主編『中国古代北方民族文化史、上』（1553～1611頁）を参考しており、1553頁では中国北方民族の教育について「中国古代北方民族の教育文化は各民族の生きる環境、地理状況、民族の文化的な伝統や歴史的な時代及び中原農耕文化との交流や融合度の違いによって、〔牧獵型の教育文化〕、〔牧獵、農耕混合型の教育文化〕、〔農耕教育文化〕と三つに分けられる。」と述べている。
- 11 鄭宏奎、国慶、陳麗琴編著『蒙古民族遊樂文化』（文物出版社出版、2008、298頁）。
- 12 王風雷氏は注4前掲『蒙古文化研究叢書・教育』の801頁で「モンゴル人の教育にはまず家庭教育が最重要であり、その背後にはいくつかの理由がある。一、古代と士族社会時代に、子供の教育には家庭が主役であり、ほとんどの場合、子供の成長全期をわたって、家庭は主な環境であったからだ。二、モンゴル人の教育の発展史から見ても、学校教育の形成した時期は家庭教育とは対照出来ないほどの時間差あるので、モンゴルの学校教育ができるまでに、家庭教育が教育を受ける唯一な場であった。三、モンゴルに学校教育が出現したあとにも（筆者：元朝初期13c）、労働階級が学校教育を受けるのに非常に難しいことであった。（筆者：貴族教育を主としていた）故に、庶民の教育は家庭に限られていた。」と述べている。当時の家庭教育は道徳、技術、科学、社会を包括した教育であったことが窺える。
- 13 佚名撰「元朝秘史」（斎魯出版社、2006年、巻一、10～11頁）。
- 14 注9前掲ウンビリゴ「モンゴル族の伝統的家庭教育」（74頁）。
- 15 注9前掲ウンビリゴ「モンゴル族の伝統的家庭教育」（74～76頁）。モンゴルの遊牧的な文化特徴によって、モンゴル学者のダ・バトゴトグフは『子供の教育法』（内蒙古人民出版社、2013年、56～58頁）でモンゴル人の一生を二十五段に分け、のち母体にいる時から成人に至るまで（16歳）の時間を15節に分けた。具体的には精福の歳、兔尾の歳、狸と虎の尾歳、母の歳、生まれ歳、揺り籠の歳、泣き歳、這い歳、足立の歳、紐縛りの歳（)、子羊飼いの歳、子牛飼いの歳、子ラクダ飼いの歳、羊飼いの歳、成年の歳と分けている。このような分け方では遊牧文化の独自性が明確にうかがえる。そしてこの15節に準じて、両親は扶養と教育のことをその段階ごとによって施すのであった。総じて、生まれ歳から紐縛りの歳までは揺り籠の歌を聴かせながら愛情たっぷり育てるのであった。子羊飼いの歳からは知力の開発重視し始め、子羊と遊ばせながら、日常の手伝いをさせ始める。これはこども

- の知力開発と成長段階に適合し、遊牧環境にも適性があったのでよく継承されてきた。
- 16 バヤル編注版『蒙古秘史』（内蒙古人民出版社、1981年、1260～1262頁）を参照。
- 17 注13前掲、佚名撰「元朝秘史」巻二、31～43頁を参照した。
- 18 注13を参照。
- 19 注9前掲ウンビリゴ「モンゴル族の伝統的家庭教育」（75頁）。
- 20 注5前掲那順巴図「成吉思汗的教育思想」（10頁）。
- 21 注5前掲那順巴図「成吉思汗的教育思想」（14頁）。
- 22 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（9頁）。
- 23 注5前掲、那順巴図「成吉思汗的教育思想」1頁では「モンゴル人にとってチンギスハーンは軍事と政治的な影響を与えたではなく、思想と教育面にも大きな意味合いを持っている。彼の教育思想は素朴な唯物論と弁証法的な見解が含まれている。彼の一生を貫く軍事と政治生活の中で、人材育成の重要視を一貫とし、モンゴル社会初期で局面した諸問題を解決することができた。例えばモンゴル文字の創出を推進し、モンゴル各部の文字と言語の統一を実現した。それに宮廷学校を興し、他民族の文化を吸収し、モンゴル人の道徳規範を作り、遊牧狩獵と軍事活動との組合せを叶えた。これらの問題はチンギスハーンのエデュケーションシステムの作っていた。彼の教育思想は当時のモンゴル人社会の産物であり、後世のモンゴル人の道徳観及び性格形成に深遠たる影響を与えた。」と述べている。また、王風雷「元代的野生動物保護法」『第二届中国少数民族科技史國際學術討論會論文集』（社会科学文献出版社、1996年版）を参照した。
- 24 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』104～132頁。
- 25 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（104～132頁）。
- 26 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（133～156頁）。
- 27 王風雷氏の研究では「元の大都是古代の冀州であった。遼太宗（927～950）の在位旗にそれを南京にし、燕京と名付けた〔中略〕北宋に帰還された後は燕山府になるが、再び金国に占領され、海陵王の貞元の初年（1153）に燕京を中都にした。1215年にチンギス・ハーンはそれを再び燕京と名付け、至元初年（1264）に燕京を中都とし、至元九年（1272）の二月に中都を大都とし、元朝の首都にした。それゆえ、元朝の大都にあったモンゴル人子弟学校と学園はチンギス・ハーン時代から始まっていたと推測できる。史書にもチンギス・ハーンが燕京に学校を作ったとの記録もあった。その位を継いだ息子のウゴディ・ハーンはその意思を受けづき、教育を重視し、学校を作っていた〔中略〕チンギス・ハーンが中都を破った八年後（1222）に、燕京で金国樞密院の基のもとで学校をつくり、四頃八畝の土地を配分していた。」と述べている。注3前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（168、169頁）。
- 28 『元史』、巻四、『世祖一』。
- 29 注26を参照。
- 30 王風雷氏の研究では「元朝の漢語ではモンゴル語を多く使うようになっていた。特にモンゴル語の名詞を漢語でそのまま借りて使い、元朝風の漢語になっていた。例えば、「ダルハン（)（工匠）」を漢語で「答刺罕」と表記していた〔中略〕このような単語は『元史』と当時の文献に大量に残っている。」と記述している。注3前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書・教育』（165頁）。
- 31 翁連溪氏の研究では「故宮には幾つもの種類の材質やパー

ジョンの『孝経』があるが、この『回鶻蒙漢文合璧孝経』は唯一の蒙漢合璧刻本として最も価値のあるものとされている。『故宮図書注録』にはこれを清代刻本とするが、『全国蒙文旧資料聯合目録』では元代の刻本だと記されている。唯一の蒙漢合璧刻本であり、元代のものだとすると、その価値は言うまでもない[中略]。『元史』巻二十で「辛亥(1311)、中書右丞李羅鉄木兒が国字(蒙古字)で『孝経』を訳して進呈したことで、天子は、これは孔子の言葉であり、王公から庶民までこれを習うべしといい、中書省に刻板模印させ、王侯から庶民まで配布するよう命じた。」との記載があるためこの『回鶻蒙漢文合璧孝経』は皇帝が命じ、中書省が刊印した宮刻本であり、刊刻時期は元至大四年(1311)であることが確定できる。」と分析している。『回鶻蒙漢文合璧孝経』の情報と翁連溪氏の研究は北京故宮博物院公式サイト: <https://www.dpm.org.cn/Home.html>。とそれに収録され翁連溪氏(故宮博物館館員)の「故宮藏、蒙漢合璧孝経、版本談」を参照し、元史の部分は原典も参照した。

- 32 松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編集『世界歴史大系 中国史1～5 [3 五代・元]』(山川出版社、1999年、第三章、元、6、元代の社会と文化、森田憲司・溝口雄三、509～513頁)を参照した。

- 33 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書 - 教育』(337～438頁)を参照した。

- 34 『元史』、卷九十三、『食貨一』。

- 35 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書 - 教育』(440～488頁)。

- 36 注4前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書 - 教育』(245～273頁)。

- 37 元の衰亡と明の台頭について、松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編集『世界歴史大系 中国史1～5 [4 明・清]』(山川出版社、1999年、第一章、明、1、漢民族の復興、山根幸夫、3頁。)では「モンゴル民族の元朝の中国支配が始まってから百年近くたった14世紀中葉、ようやく元朝の統制力は弱化、財政の窮迫にともなう、人民に対する収奪が強化された。それにくわえて、自然災害が発生し、ことに黄河の決潰は同地方の住民を悲惨な状況に追い込んだ。これまでに「夷狄」の君主が漢土に君臨することも「天の授くところなり」として、おとなしく服従していた漢民族も、日々生活さえ成り立たない状況では、もはや我慢しきれなくなった。そこに、モンゴル支配打倒の民族主義的な旗幟掲げて立ち上がったのは紅巾軍であった[中略]東系紅軍の一武将郭子興のもとに兵士として身を投じたのが朱元璋であった。彼は濠州鐘離県(安徽省鳳陽県)の貧農の家に生まれた。少年時代に淮河流域をおそって干害と疫病のために、両親はじめ兄弟もほとんど死亡した。そのため同地の皇覺寺(現在の興隆寺)にはいつて出家し、生活の資をえるために周辺地域を托鉢して歩いた。この行脚生活の体験は、のち彼がこの地域に勢力をきずく上に大きな基礎を作った。」とのべる。さらに、同書12頁の明朝の樹立では「江南をほぼ統一した朱元璋は、1367年10月、徐達を征虜大將軍、常玉春を副將軍に任じて、25万の大軍を率いて、元朝打倒のため北伐を開始させた[中略]北伐軍は順調に進撃したので、1368年正月、朱元璋は応天で皇帝につき、国号を定め、洪武と建元した。これが明の太祖である。明朝は「一世一元」と定めたので、太祖は年号によって洪武帝と称されるが、以下の皇帝も同様である」と記述する。

- 38 北元について、注37前掲『世界歴史大系 中国史1～5 [4 明・清]』(明代のモンゴル(一)—モンゴルの分裂、森川哲雄)の235頁では「1368年元朝のトゴン・テムル・ハーン(順帝)

明軍に追われて大都から逃亡し、その二年後に内モンゴルの応昌(筆者加筆: 応昌は現在内モンゴル赤峰市克什克騰旗あたりで、筆者の出身地からおおよそ西200kmの距離である。)の地で死去した。これを継いだのが長子のアールジュリダラ(ビリクト・ハーン、在位1370～78)で中国への再進出をねらったが、たびかさなる明のモンゴル遠征のために本拠地を外モンゴルの、かつての都、ハルホルムへと移動することを与儀なくされた。その後、弟のトグス・テムル(ウスハル・ハーン、在位1378～1388)がハーン位を継いだ、1388年に藍玉の率いる明軍の襲撃を受けて敗走し、本拠地のハルホルムへの逃れ途中、トラ河畔で側近のイエスデルに殺害された。その長子、天保奴も殺害され、他方次子の地保奴は明にとらわれた。ここでクビライの王統は断絶した。このように元朝政権が北に移動したことから、この時代は「北元」とよばれている。」と概述している。

- 39 明と北元の対立についてはまず、注38を参照。それに、注37前掲『世界歴史大系 中国史1～5 [4 明・清]』(明代のモンゴル(一)—モンゴルの分裂、森川哲雄)の236頁では「明では永楽帝(在位1402～1424)が甥の建文帝(在位1398～1402)を倒して即位し(靖難の変)1408(永楽六)年にモンゴルに朝貢するよう要求した。明に朝貢することはたんに使節を派遣することだけではなく、その政治体制の枠内に入るとともに、属国になることを意味している。したがってそれ自体モンゴル側の受け入れるところではなかったから、オルジェイ・テムルは永楽帝の要求を拒否し、さらにその使節を殺害するにいたる。それに怒った永楽帝は10万兵を派遣しオルジェイ・テムル、アルクタイの追討をはかったが失敗した。永楽帝はついに自ら兵を率いて彼を征討すること決意し1410年に50万の軍隊がモンゴルに進撃した。五回にわたる永楽帝のモンゴル親征の始まりである。」と述べている。さらに、このような敵対事態が長らく続くなかでも、明とモンゴルの間に貿易が始まりとする関わり合いは断絶しなかった。それについて、同書238頁では「実権を掌握したエセン(?～1454)が関心を持ったのは明との交易であった。モンゴル側からみて明との交易には、密貿易は別として二つの方法がある。一つは国境付近に公の市を(いわゆる馬市)を開設し、定期的に売買するものである。もう一つは朝貢使節を派遣することである。これは朝貢使節にたいして明から与えられる恩賞を期待するものであったが、同時朝貢使節という名目で多くの商人を同行させ、中国国内で交易をおこなうことが一般できであった。」また252、253頁では「アルタン(北元の皇帝、在位1551～1582)は1542年ののちも46年、48年と再三正式な交易をもとめて明に使節を派遣している。しかし明側はアルタンの態度が恭順ではないとの理由ですべてこれを拒絶した。これにたいしアルガンは1550(嘉靖29、庚戌)年秋、大挙して明への軍事行動にでた。明に馬市の開設を力によって認めさせようとしたためである。アルタンの軍は北京から130kmほど離れた古北口から侵入し、途中が懷柔順義通州を次々略奪して北京にせまり、ついに9月北京城を包囲するに至った[中略]馬市を拒否されたアルタンはこれ以降やく20わたって連年明の北辺を侵略することになる[中略]この間多数の漢人が長城をこえてモンゴリアに逃亡し、アルタンの保護のもとに入った。その原因はいくつかあるが[中略]長城をこえた漢人農民たちは後章でもふれるように大規模に草原を開墾し、穀物を栽培したが、これはアルタンの経済力を一層高めることにもなった。」と述べる。さらに、同書263頁での「現在写真などでみられる、いわゆる万里の長城はほとんどが明代に作られたものである。」との記述から、これまでにまとめた、長期にわたる明とモンゴルの対立を窺えるであろ

う。

40 注 39 を参照。

41 注 37 前掲『世界歴史大系 中国史 1～5 [4 明・清]』(明代のモンゴル(一)—チンギス・ハーン家の復興、森川哲雄) 262 頁で、清朝最初のモンゴル征服について「しかしリグダン・ハーンが青海征服に出発した間もなく、後金国の太宗は内モンゴルに政治的な空白が生じたのをねらって遠征し、1632 年、フフホトを占領してしまった[中略] 1636 年春、後金国の首都瀋陽に満州・モンゴル・漢人の有力者が集まり、ホントイジに皇帝の称号を奉じた。ここにホントイジは正式に中国の皇帝でもあることを表明した。これとともにモンゴル諸侯はかれにボグド・ハーンの称号を奉じている。ボグド・ハーンとはチンギス・ハーンの別号であって、チンギス家の出身ではない満州族のホントイジにたいしモンゴリアの支配の正当性を与えたことを意味する。これを機に国号を後金国から大清国に変えられ、さらに年号も天聰から崇徳にあらためられたのである。」と記すが、これで内モンゴルは清の支配下にはいり、1696 年の康熙帝(在位 1661～1722)のガルダン親征で外モンゴルも清の制下に収め、引き続き乾隆帝(在位 1735～1796)のジュンガル征服により西モンゴルも清朝に敗北し、モンゴリアはほとんど清朝に征服された。

42 注 37 前掲『世界歴史大系 中国史 1～5 [4 明・清]』(山川出版社、1999 年、第二章、清、7、清朝の藩部(一)—モンゴリア、森川哲雄) 394、395 頁では「内モンゴルを征服した清朝はこれを統治する機関として、1636 年、蒙古衙門を設置したが、二年後の 1638 年にこれを理藩院と改称している[中略] 行政面ではモンゴルに盟旗制を設けた。一番上の組織は盟で、その下に旗がおかれたが、旗は清代モンゴルの行政組織の中心であった(筆者加筆: この盟旗制度は現在もお内モンゴルの主な行政枠組みのままである。)[中略] また兵制についてみると、清朝の軍事・社会組織として八旗の制度があるが、後金国時代に降伏したモンゴル人たちは当初この満州八旗のなかにくみいれられた。その後内モンゴルが清朝に合併されると、1635 年に満州八旗から蒙古八旗が分離・独立している。内外モンゴルの各旗は行政単位であるとともに軍事単位でもあった。」と総論している。

43 近現代になって清朝のモンゴル八旗の科举試験を清の全体の科举制度に組み込み研究した代表人物は商衍鎰と王徳昭氏である。商衍鎰『清代科举考試述録』(三聯書店、1958 年)。王徳昭『清代科举制度研究』(中華書局、1984 年)。

44 それについて王風雷氏は『蒙古文化研究叢書 - 教育』(内蒙古教育出版社、フフホト、2016 年、705 頁)のなかで「統計すれば、清朝におけるモンゴル八旗の進士の総人数は 177 名であるが、全体のモンゴル族進士の一部に過ぎないのであり、それ以外も大勢いるはずである。それは、満州八旗に所属していたモンゴル受験生は合格後、出身を満州八旗と記するので、モンゴル族とみなすのは難しくなるからである。」と述べている。

45 清・蒙古巴魯特恩華詠春輯『八旗芸文編目』(遼寧民族出版社、2006 年)。

46 王風雷の研究によれば、モンゴル八旗は以下のように文化的な発展を見せた。「翻訳作業以外に、モンゴル八旗の進士たちは大量な漢語論文と書籍を発表していた。統計によれば、『八旗芸文編目』という本のなかで、八旗モンゴル出身の作者が書いた文章は(数は少ないが、モンゴル語の文章もあった) 130 部が編目されていた。この中で、モンゴル進士たちが漢語で書いた文章は 57 部で、44.6%を占めていた。八旗モンゴル進士たちが創作した文章の全体の質は非常に高く、大部分は当時中国の上級レベルに入っていて、諸研究者に認められて

いる。」注 4 前掲、王風雷『蒙古文化研究叢書 - 教育』712 頁。

47 楊向群、馮天亮『走向世界叢書、西学漸記(容閔)』(岳麓書社出版、1985 年)。

48 「耐勒図(1912～1985)、ダグル族、黒竜江省嫩江納河の人。画家、1928 年から上海美術専門学校で学び、1935 年に日本に赴き東京高等師範学校の図画手工研究所で 4 年間学び、帰国し、王爺廟(今のウランホト市)の蒙民習芸所などで美術を教えていた。1954 年に内モンゴル師範学院が成立すると、芸術科の主任と美術教員を務める。1955 年から内蒙古人民出版社の美術編集者となる。文化大革命後、中国美術家協会内モンゴル支部の副主席を務めたことがある。」王鵬瑞主編『草原芸術研究書系、当代草原芸術年譜・美術巻』(内蒙古大学出版社、2014 年、27、28 頁)。

49 「グンサンノルブ親王はモンゴリアの文化の発展に大いなる役割を果たした[中略] 彼の行動を些細に観察すると、モンゴル人のためになる方法を多角的な視点から思慮していたのがよくわかる。そしてモンゴル人の復興には教育は最も有力な方法であることを強く認識していた[中略] ここで提起すべきことはグンサンノルブが貧困層の子供の入学をととても重視していたことである。これは彼の教育事業の重要な特徴になっている。当時、貧民のこどもや、さらに王宮の奴隷人の子供も貴族、官人の子供と同じ学校に通っていたことで、孔子がいう「有教無類」を実現していた[中略] グンサンノルブの興学事業の核はかれが提唱する人間平等思想に由来している。もちろん彼のこのような思想は西洋ヒューマニスト思想の影響を受けたからだと思う(筆者加筆: 彼の教育背景からは、儒教に潜む人間平等思想が西洋のヒューマニスト思想と互いに矛盾していなかった考えられる)[中略] 彼は国家の復興には外国から学ぶことを重要視していた。[中略] 日本見学を終えたグンサンノルブは本旗の現実から出発して、教育の振興をより重要視するようになっていた[中略] 現時点での資料によればグンサンノルブがつくった女子学校はモンゴル史上初の女子学校と思う[中略] グンサンノルブがつくった学校では漢地からの教員だけでなく、日本からの教員招きにも努めていた[中略] グンサンノルブがつくったハラチン西旗の学校ではモンゴル語、漢語、日本語の授業以外に、その他多数の科目を設けていた。とくに女子学校の授業科目は最も特徴的だといえる。この学校ではモンゴル語、漢語、日本語、歴史、地理、数学、礼儀、音楽、体育、書道などの科目を開設しただけでなく、女子の特性にそった家事や織物の科目も設けられた。」と述べている。それに、烏雲高娃氏の『1930 年代モンゴル・ナショナリズムの諸相—満州国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想—』(晃洋書店、2018 年、32～36 と 76 頁)を参照した。

50 注 49 前掲、烏雲高娃氏の『1930 年代モンゴル・ナショナリズムの諸相—満州国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想—』を参照した。

51 注 49 前掲、烏雲高娃氏の『1930 年代モンゴル・ナショナリズムの諸相—満州国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想—』の 181 頁では「日本はモンゴル人に対する懐柔策として教育啓蒙政策を推進していた。満州国はモンゴル語教科書の編纂、モンゴル語の刊行物の発行、モンゴル人向け学校の設立、モンゴル人の日本留学援助などを行った。これが内モンゴルの近代化、モンゴル人の発展について積極的な役割を果たした。1941 年の段階では、満州国のモンゴル人向けの中高等教育機関は、国民高等学校 8 校、女子国民高等学校 1 校、師道学校と産業技術学校がそれぞれ 5 校と 6 校に増えて、モンゴル人向けの中等教育機関は合計 20 校、在学学生 3073 名になった。初等教育機関は 1044 校、在学生 6 万 3564 名を数え、就

学率（適齢児童）は48.75%になった。」と記載している。

- 52 注2前掲の拙稿「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在－蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから－」の90、91頁にて、内モンゴル師範大学美術学院の元教授の奥迪氏のインタビューによる調査で、内モンゴルの美術教育の近現代的な発展史を把握することができた。のち、内モンゴルの近代について奥迪氏は以下のように述べていた：

内モンゴル自治区は1947年4月23日に自治区最東部に位置する王爺廟（現在はウランホト市）で成立した。私の父は1946年に共産党の記者となり、自治区が成立すると報道陣の一員となっていた。父は、旧日本軍が後ろ盾になっていた旧満州国で教育を受けたことがあり、日本語も流暢に話すことができ、記者となるのに必要な教育的基礎もそこで習得したという。父の本籍は黒竜江省依克明安旗だった。その先祖は元オイラト部で、西モンゴルの一部だった。二百六十年前に清朝との戦争で、今の新疆ウイグル自治区から黒龍江省に移住してきた人たちだ。

今私たちがいるフフホトは、内モンゴル自治区の首府とはいえ、私が幼い頃の1950、60年代にはモンゴル語の言語環境をほとんど失っており、漢語でのコミュニケーションを基本としていた。親たちの一部はモンゴル語を話せたが、子供たちはほとんど漢語で話していた。私の小学校の入学時にクラス分けがあった。五つのクラスにモンゴル語のクラスは一つだけであり、7人のメンバーしかいなかった。私自身も親の選択した漢語クラスに入り、母も漢語しか話せないことによって家庭内も漢語だけの会話になり、結果的にモンゴル語は基本的に話せないことになった。民族について認知するようになったといってもこの文化的な環境において成長する中であつた。例へば内モンゴルの近代歴史についての本を読むなかで、多くの知識を得たり、外国人が書いた『チンギス・カン伝記』などを讀んだりしていた。

内モンゴルにおける漢文化的な影響は早くからあつた。当時も現在もフフホトは漢族が大多数だ。当時のモンゴル族の大半が東部から移住してきた人たちだった。内モンゴル自治区は最初、東部のウランホトで成立した。今の首府であるフフホト市は帰綏市だった。私の父も東部から移住してきた一人だ。私より年配の1920～1930年代に生まれたフフホト在住のモンゴル族の人たちに聞けば大概が東部からの移住者であつた。地元のモンゴル族はトゥメト部だった。だが、彼らはほとんどモンゴル語を話さなくなっていた。外来のモンゴル族は自治区の首府がウランホトから1954年フフホトへ遷都したのに伴う移住者たちだった。1950年代初期の移住者は知識人が多かった。また一部に工人もいた。印刷工場があつたからだ。これらの移住者のうち、モンゴル族は東部からが多かった。漢族は全国各地から来ていた。フフホト旧城に住む地元の人はほとんど漢族で、本籍を聞くと山西省が多かった。新城の大半も漢族だった。当時の移住者たちにとってはこういった環境だった。

- 53 注3前掲、陳忠勇等編著『中国民族教育發展報告2017 内蒙古篇』3、417頁。

- 54 それについて注2前掲の拙稿「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在－蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから－」95頁では、美術教育の面から奥迪氏は以下のように懐述していた：

民国時代に近代美術が内モンゴルにおいてほぼ空白だったことを理由に、自治区と中華人民共和国の成立後、自治区外部から学校を卒業して故郷の支援に戻ってくる人材もいれば、外省からの辺境支援者も大勢いた。しかし美術団体はな

かつた。1947年の内モンゴル画報社の成立を画期に、美術界は動き始めた。1954年に内モンゴル初の美術専攻を持つ大学となる内モンゴル師範学院が成立し、当初は美術の教員は3人しかいなかったが、内モンゴルの美術教育の発展の転機となった。徐堅先生はその美術教員の一人で、1954年の8月に内モンゴルに来て就任していた。もう一人は盧斌先生だった。彼はフフホトから東に150kmほど離れたところにある豊鎮出身で、フフホト第一中学校の教員だった。当時は帰綏省がフフホトに合併する時期でもあつた。もう一人は耐勒図先生だった。

- 55 阿部洋編著『改革・解放下中国教育の動態－江蘇省の場合を中心に－』（東信堂、2015、序言1～7頁）。この時代の実体験者としての筆者は2000～2004年に、内モンゴルの重点大学であり、美術専攻の中心地であつた内モンゴル師範大学の美術学院で学部時代を送っていた。実経験の一つとして、当学院の2000年の入学者数は前年度より倍以上も増えていた。それは教育改革による、学校の自主経営度と民営化容認など一連の政策下での「拡招」の結果であつた。

- 56 注3前掲、陳忠勇等編著『中国民族教育發展報告2017 内蒙古篇』6頁。

- 57 筆者の研究統計に加え、この時代の実体験者としての筆者は2000～2004年に、内モンゴルの重点大学であり、美術専攻の中心地であつた内モンゴル師範大学の美術学院で学部時代を送っていた。実経験の一つとして、当学院の2000年の入学者数は前年度より倍以上も増えていた。それは教育改革による、学校の自主経営度と民営化容認など一連の政策下での「拡招」の結果であつた。

- 58 注37前掲、『世界歴史大系 中国史4 明～清』、418～424頁では、「清朝はモンゴル人の保護を目的にモンゴルに対して封禁政策をとり、漢人たちの進出を制限したが、結果的にはこれを抑えることはできず、その数は時代がたつにつれて増加していった。すなわち山西商人たちはフフホトを中心地に内モンゴル西部を主として、また北京商人たちは内外モンゴル各地で、さらに山東省黄県、河北省楽亭県の商人は内モンゴルで交易に従事した。これらの商人たちはモンゴリア各地の都市、例えば内モンゴルではフフホト、赤峰（筆者補足：筆者の故郷で、筆者も話せるが、地元の漢族は山東に近い方言を話す）などに集まり、そこで別に漢人商人の町をつくった。商人とともに農民も大量にモンゴルに進出した。清朝前半期における漢人農耕民のモンゴル流入は生活困窮などが要因であつたが、のちには、むしろモンゴルの王公が積極的に呼びよせることが多くなっていく。ここに清朝政府は従来の封禁政策を転換し、新政策、いわゆる「移民実辺」を実行した。すなわち単にモンゴルの王公が出した開墾許可申請を認めただけでなく、むしろかれらに対し清朝政府のほうで漢人農民をまねいて開墾するように積極的に説いたのである。宣統2年（1910）、清朝はそれまでの封禁政策も放棄し、モンゴルの開墾、漢人の進出を自由にしただけではなく、モンゴル人と漢人の分離政策も放棄し、通婚禁止やモンゴル人の名前に漢名を用いることの禁止などもすべて無効とした。」と記載。また、注2前掲の拙稿「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在－蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから－」では内モンゴルの民族人口の変動について調査している。筆者の実家は内モンゴルの東にある赤峰市にあり、従来、漢化の進んだ地域でもある。モンゴル族の母はモンゴル学校を通い、モンゴル語と漢語の読み書きと会話ができる。父もモンゴル族であるが、漢族学校を通い、モンゴル語は話せるが、文字は読めず、漢語と漢字には堪能である。父の家族も漢族の文化の影響は強く、大半はモンゴル語

より漢語が堪能である。筆者も蒙漢両言語を兼ねており、周りの多くの家庭もこういった状況であることを事例に紹介しておきたい。

- 59 現代社会では、子供には成長の権利は保障され、親の育てる権利も認められている。それに、親の責任は古くから現代まで道徳的と法律的に義務づけられている。子供の成長には二つ重要な要素がある。一つは現実を認識することである。二つ目は未来に対する準備である。それを守ってくれるのは古くは家庭と親であり、現代では学校と社会が大いに加わっている。家庭教育について、勝田守一氏は『教育とはなにかー家庭の教育1』（岩波書店、東京、1972年、17頁）で「おとなは、親であろうと、なかろうと、子供たちの現在の生活、遊びと学習と訓練の生活をできるだけ充実させるために、力を合わせなければならないし、またそれと同時に、子供たちが活動する未来の社会と、未来の活動を用意する子供たちの学習について考える義務を負っている。これが教育について考えるということなのである。」と主張している。教育の時代性について、東京大学名誉教授の石井威望氏は「携帯電話時代の教育改革」（『中央公論』、2004年2月号）では「教育は過去から考える（過去心理）ではなく、未来から考える（未来心理）が重要です。子供たちは未来を生きていくのですから。特に技術革新で大きく変わっている現在、未来の世界を感じなければ教育を考えようありません。」と論じている。
- 60 拙稿「モンゴル書道の歴史と現在」（『美206』京都市立芸術大学美術教育研究会発行、2018年11月）を参照。

参考文献

（モンゴル語）

- 王風雷『蒙古文化研究叢書 - 教育』内蒙古教育出版社、フフホト、2016年。
- 中国社科院民族文学研究所編『「格斯爾」論集』内蒙古人民出版社、フフホト、2003年。
- 内蒙古社会科学院『中国蒙古学』双月刊、第46巻、総第276期、中国蒙古学編集部出版、フフホト、2018年。
- ワルター・ハイシッヒ著〔ドイツ〕、阿必達と阿特横共訳『蒙古歴史与文化』内蒙古文化出版社、2015年。
- 日希桑博『蒙古歴史録』内蒙古科学技術出版社、2012年。
- 扎格爾、王滿特嘎主編『蒙古民俗文化研究』内蒙古人民出版社、フフホト、2011年。
- 敖其『蒙古族伝統物質文化保護利用研究』内蒙古大学出版社、フフホト、2015年。
- ジャ・バト「モンゴル族家庭教育の重要性について」内蒙古自治區教育廳、『内蒙古教育、A版』、2017年第3期63頁。
- ダ・バトトゴトグフ『子供の教育法』内蒙古人民出版社、2013年。
- バヤル編注版『蒙古秘史』内蒙古人民出版社、1981年。

（中国語）

- 孟達来『阿爾泰諸語言共通性的形成与北方民族的歷史接触』中国社会科学出版社、北京、2001年。
- 林干『内蒙古歴史文化叢書 - 中国古代少数民族史新論』内蒙古人民出版社、1993年。
- 喬玉光主編『内蒙古自治区第一批自治区級非物質文化遺産名録図文集』内蒙古人民出版社、2015年。

- 内蒙古自治区教研室『内蒙古教育』内蒙古教育出版社出版、フフホト、2017年第3期。
- 張碧波、董国亮主編『中国古代北方民族文化史（上下）』黒龍江人民出版社、2001年。
- 陳忠勇等編著『中国民族教育發展報告 2017 内蒙古篇』社会文献出版社、2017年。
- 鄭宏奎、国慶、陳麗琴編著『蒙古民族遊樂文化』文物出版社出版、2008年。
- 王風雷、「元代的野生動物保護法」『第二届中国少数民族科技史國際學術討論會論文集』社会科学文献出版社、1996年版。
- 『元史』。
- 清・蒙古巴魯特恩華詠春輯『八旗芸文編目』遼寧民族出版社、2006年。
- 楊向群、馮天亮『走向世界叢書、西学漸記（容閔）』岳麗書社出版、1985年。
- 王鵬瑞主編『草原芸術研究書系、当代草原芸術年譜・美術巻』内蒙古大学出版社、2014年。
- 佚名撰『元朝秘史』斎魯出版社、2006年。

（日本語）

- ビリガバト「モンゴル語デジタルフォントの合字に関する研究 - 直線型及び日直線型フォントの開発の試み - 」京都市立芸術大学大学院博士論文、2008年。
- 松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編集『世界歴史大系 中国史1～5』山川出版社、1999年。
- 広田照幸『教育』岩波書店、東京、2004年。
- 勝田守一『教育とはなにかー家庭の教育1』（株式会社岩波書店、東京、1972年。
- 烏雲高娃『1930年代モンゴル・ナショナリズムの諸相—満州国の内モンゴル「知識人」の民族意識と思想—』晃洋書店、2018年。
- 阿部洋編著『改革・解放下中国教育の動態—江蘇省の場合を中心に—』東信堂、2015年。
- 石井威望「携帯電話時代の教育改革」『中央公論』2004年2月号。
- 拙文「中国内モンゴルの大学美術教育の過去と現在—蒙漢両族の血を受け継いだ画家奥迪（オーディ）のインタビューから—」『京都市立大学美術学部研究紀要』、63号。
- 杉山正明『東洋史研究叢刊之五十六（新装版3）〔モンゴル帝国と大元ウルス〕』京都大学学術出版会、2004年。
- 田山茂『蒙古法典の研究』日本学術振興会、1967年。
- 小林高次郎『モンゴル史考論』雄山閣出版、1983年。
- 矢野仁一『近代蒙古史研究』弘文堂印刷部、大正14年。
- リヤザノフスキ著、青木富太郎訳『蒙古法の基本原理』生活社、昭和18年。
- 川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』山川出版社、2013年。
- 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店、2012年。
- 萩原淳平『明代蒙古史研究』同朋出版社、1980年。
- 吉田順一監修『モンゴル史の研究—現状と展望』明石書店、2011年。
- チョイバルサン他著、田中克彦編訳『モンゴル革命史』未来社、1971年。
- 岡田樹『清代モンゴル盟旗制度の研究』東方書店、2007年。
- 相原孝久、濱田純一『蒙古地誌、上下巻』富山房、1912年。

